

二十一世紀から 十年すぎて 大野道夫

二十一世紀になってから十年がすぎようとしているが、鉄腕アトムなどに描かれていた二十一世紀とはだいぶ違い、不況のなかで二〇一〇年も終わろうとしている。

そうしたなかで小高賢はこの十年をふり返り、斎藤史（〇二年）、春日井建（〇四年）、塚本邦雄（〇五年）、築地正子（〇六年）、菱川善夫（〇七年）、竹山広（一〇年）などの多くの物故者をふり返っている（『短歌年鑑』角川）。こうしてみると、前衛短歌に関わった人々が亡くなったことがあらためてわかる。そういえば昨年早稲田短歌会に参加した時に、雑談の中ではあるが短歌をはじめた動機として穂村弘、梶野浩一をあげた者がかなりいたが、学生たちにとつて彼らは父親の世代になってきており、時代の変化を実感した。

また佐佐木幸綱、穂村弘等は、女性の歌、口語化、無所属化などの問題について座談会をおこなっている（『短歌年鑑』短歌研究社）。そのなかで穂村は、口語化と結社に入らず無所属化している現象の関係について、文語の添削は助詞をちよつと直しただけで鮮やかな効果が見えるが、口語の添削は「おれの感じと違うんです」みたいに言われる、だから口語が増えていくと、先生から添削を受けるという習い事的側面が弱くなるのではないかと、のべている。むろん結社は添削だけをやっているのではないが、

この口語化と無所属化との関係への視点はなかなか鋭い、と思つた。

また年末には、超結社の「さまよえる歌人の会」が「新人賞特集」の集まりをおこなった。「さまよえる」は数年前にはじまつた若手中心の会で、毎月歌集を読む活動をおこなっている。そして十二月は新人賞についてレポートし、受賞者もまじえて話し合うということなので、若手でない私も参加してみた。

会場は渋谷で二十人前後の参加があり、レポートをもとに活発な意見が出された。

たとえば千種創一（塔、東京外大短歌会）は、一月号の時評で紹介した吉田竜宇に対して、生まれた時からできあがっている世界の中での現実感のなさを特徴としてあげた。また作品中の言葉を、「みんな」（戦争、新聞など）、「ぼくたち」（なにかを忘れたまま、被害届けを出そう、など）、「俺」（自慰、立ちつくす、など）に分類し、最後は一人となった「俺」が「みんな」に対し恐怖を感じている、と分析した。

また石川美南は、大森静佳に対して、どんな瞬間も「終わり」を内包している（からこそ、歌になる）、季節、植物への信頼、などを特徴としてあげた。また

大森 静佳

について、〈左から〉のうまさなどは、大森と同じ「塔」の吉川宏志と共通する特徴だ、という指摘もあった。

このような同時多発的なさまざまな動きが、次の時代を開くことを期待したい。